杉浦非水裝幀

廣津柳浪集

川上眉山集

齋藤綠雨集

改造社版

昭和四年三月一日印刷
昭和四年三月三日發行

現代日本文學全集 第七篇

著者 廣津柳浪 川上眉山 齋藤綠雨

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43) 一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番

株式會社秀英舍印刷

「柳浪・眉山・緑雨集」目次

廣津柳浪集

巻頭寫眞（照影・筆蹟）

父柳浪について……四

小說篇

今戸心中……五

雨……三三

八幡の狂女……五六

變目傳……九五

淺瀨の波……一二八

龜さん……一五一

黑蜴蜓……一六八

女子參政蜃中樓……一八一

戲曲篇

目黑巷談……二六四

年譜……三〇九

川上眉山集

巻頭寫眞（照影・筆蹟）

川上眉山について……三一三

小說篇

大さかづき……三一三

書記官……三三九

うらおもて……三四二

うつせ貝……三四八

絃聲……三五四

小町紅……三六八

春宵……三七四

ゆふだすき……三八二

隨筆篇

ふところ日記……三九一

年譜……四〇三

齋藤緑雨集

巻頭寫眞（照影・筆蹟）

緑雨君の作を選みて……四〇六

小說篇

おぼろ夜……四〇七

門三味線……四一四

隨筆篇

おぼえ帳……四三四
眼前口頭……四五八
霏々刺々……四七一
巖下電……四七六
青眼白頭……四七九
長者短者……四八一
正直正太夫死す……四九〇

俳句篇

春一ダース……四九一
のこり物……四九一
小細工集……四九二
枯菊十句……四九二
ひとりごと……四九三
豆の花……四九三

小唄篇

こほろぎ……四九四
からす……四九四
まつの木……四九四
つき……四九四
えんきり……四九四
すみぞめ……四九四
みじか夜……四九四
珠數かひ……四九五
こひ中……四九五
くぜつ……四九五
つき花……四九五
わかれ……四九五
ねざめ……四九六
くりこと……四九六
かね……四九六
穗すゝき……四九六
くさの戸……四九六
出もどり……四九七
まよひ……四九七
ちりの世……四九七
いのち……四九七
やみ夜……四九七
まばたき……四九七

略傳……四九八
著作年表……五〇二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

廣津柳浪集

父柳浪について

父は餘り私達に向つて文學談をした事はなかつた。殊に自作については殆んど口を開くことがなかつた。

併し稀に父が話した話から父の創作態度を推測して見ると、初期に『殘菊』等を書いた時分、何を書いても主觀的になるので、どうかしてその主觀の色を作から沒したいと苦心したらしかつた。女を書いても男を書いても結局作者の『私』が色濃く出てしまふ。それは作者の説明が惡いのだ。そこで説明を極力省いて、會話と狀態の描寫とで人物を現す事に努めようと決心し、作風を一變するために、二三年何も書けなくなつた時代があつたといふ。そんな風にしてやつとその新しい書き方を支配出來るやうになると、『變目傳』『黑蜴蜓』『龜さん』『今戸心中』『河内屋』などが、續けて書けて來たものらしい。

父はその書き方を極端まで押詰めて考へた事もあるらしい。總ての地の文はみな説明であるといふ風にさへ考へたらしい。そして會話だけで書かうと考へたらしい。何かの場合に森鷗外氏にその話をしたら、『だが、それは損ではないか』と鷗外氏が云つたといふ話を父は私にした事がある。

全部を會話で書くといふ極端な考へ方は、終に實行しなかつたらしいが、併しさういふ考へ方は、父の作の會話を多くし、追々に父の作を冗漫にして行つた嫌ひがある。舊い型を打破する時に役立つた武器に、今度はみづから囚はれたのである。

それから父はこんな事をも話した。『尾崎（紅葉氏）が或時、「君はたとひ一言一句でも、西鶴や近松にもないやうな名文句を自分が書いてゐると思ふ事はないか」といふから、私は「そんな事は考へて見たこともない」と答へた。すると尾崎は「さうかね。自分にはあるがなあ」と云つた。そして更に尾崎は「君は一つの名文句を生かして使はうと思ふために、作の筋を變へる事はないか」といふから、「そんな事は自分にはない」と答へると、「さうかね。僕はある」と尾崎は云つた』

自分はこの話に紅葉氏と父との相違がはつきり解ると思ふ。

父は想像力といふ事についてこんな事を云つた。『想像力を働かして見て初めて想像が湧くのだ。自分の頭にどんな想像力があるかといふ事は、働かして見なければ解りはしないのだ。働かして見れば、思ひも寄らぬ微妙さが人間の頭腦にはあるのだ』

父は書けなくなつた理由について云つた。『自分が書けなくなつたのは、自分を省みるやうになつたからだ。後を見ずに、眞直ぐばかり向いてぐんぐん進んで行く方が作者はのびる』

父は苦笑しながら又かうも云つた。『人間は自惚れが強くて、傲慢である方がいい。俺にはその兩方が足りなかつた。俺は、誰かが字を書いて吳れなどといふ、すると、それが何だかからかはれてゐるやうな氣がする。――さういふ感じ方が惡いのだ』

父は明治以來の文士の中では、字が上手だつた方の一人だつたらしい。けれども、そんな感じ方のために、人に賴まれても字は殆んど――何枚といふ程度しか書かなかつた。

父は晩年は文壇との交渉を絕つて、淋しくて、そして孤獨だつた。

昭和四年一月二十二日

廣津和郎

今戸心中

（一）

大空は一片の雲も宿めないが黒味渡ツて、廿四日の月は未だ上らず、靈あるが如き星のきらめきは、仰げば身も冽る程である。不夜城を誇顏の電氣燈にも、霜枯三月の淋しさは免れず、大門から水道尻まで、茶屋の二階に甲走ツた聲のさゞめきも聞えぬ。

明後日が初酉の十一月八日、今年は稍温暖く小袖を三枚重襲る程にもないが、夜が深けては流石に初冬の寒氣が身に浸みる。

少時前報ツたのは、角海老の大時計の十二時である。京町には素見客の影も跡を絶ち、角町には夜を警めの鐵棒の音も聞える。里の市が流して行く笛の音が長く尻を引いて、張店にも稍雜談の途斷れる時分となツた。

廊下には上草履の音がさびれ、臺の物の遺骸を今室の外へ出して居る所もある。遙かの三階からは甲走ツた聲で、喜助どん〱と床番を呼んで居る。

『腌臢いよ。餘りしつこい、いぢやアないか。くさくさ爲ツちまふよ。』と、自烈體さうに廊下を急歩で行くのは、當樓の二枚目を張ツて居る吉里と云ふ娼妓である。

『其樣事を云ツてなさツちやア困りますよ。鳥渡お出でなすツて下さい。花魁、困りますよ。』と、吉里の後から追縋ツたのはお熊と云ふ新造。

吉里は廿二三にもならうか、今が稼ぎ盛の年輩である。美人質ではないが男好のする丸顏で、而も何處にか劍が見える。睨まれると凄い樣な、覗然されると戰付きたい樣な、淸しい可愛らしい重縁眼が少し催涙んで、一の字眉を癪だと云ふ鹽梅に釣上げて居る。纈腮を態と突出した程上を仰き、左の牙齒で上脣を噛んで居るので、高い美しい鼻は高慢らしくも見える。懐手をして肩を搖ツて、昨日あたりの島田髷をがくり〱と點頭かせ、今月一日に更衣を爲たばかりの袿襠の裾に廊下を拭はせ、大跨に而も急いで上草履を引摺ツて居る。

お熊は四十格向で、薄痘痕があツて、小鬢に禿があツて、右の眼が曲んで、口が尖らかツて、如何見ても新造面――意地惡別製の新造面である。

二女は今まで爭ツて居たので、腌臢がツて室を飛出した吉里を、お熊が追掛けて來たのである。

『裾が引摺ツてるぢやアありませんか。爲樣がない事ね。』

『好いぢやアないか。引摺ツてりや、如何したと云ふんだよ。お前さんに調へて貰やア爲まいし、關ツてお呉れでない。』

「左樣さね。花魁をお世話申した事はありませんからね。』

吉里は返辭を爲ないでさツ〱と行く。お熊は倚ほ附纏ツて離れぬ。

『ですがね、花魁。餘り我儘ばかりなさると、私が御内所で叱られますよ。』

『ふん。お前さんがお叱られぢやお氣の毒だね。吉里が斯う〱だツて、お神さんに何とでも訴けてお呉れ。』

白字で小萬と書いた黑塗の札を掛けてある室の前に、吉里は歩を止めた。

『善さんだツてお客様ですよ。先刻から御酒肴

が來てるんぢやありませんか。』

『善さんもお客だツて。誰がお客で非いと云ツたんだよ。當然な事をお云ひでない。』と、吉里は障子を開けて室内に入ツて、後をぴツしやり手荒く閉めた。

『如何したの。また癇癪を發してお居でだね。』次の間の長火鉢で燗を爲ながら吉里へ聲を掛けたのは、小萬と呼び當樓のお職女郎。娼妓染みないで何處にか品格もあり、吉里には二三歳の年増である。

『だツて、餘り腌臜いんだもの。』

『今晩もかい。能う來るぢやアないか。』と、小萬は小聲で云ツて眉を皺せた。

『察してお呉れよ。』と、吉里は戰慄しながら火鉢の前に蹲踞んだ。

張替へたばかりではあるが、朦朧たる行燈の火光で、二女は呢と顏を見合せた。小萬が莞爾すると吉里も左も嬉しさうに笑ツたが、又左も術なさうな色も見えた。

『平田さんが今お出でなさツたから、お梅どんを直に知らせて上げたんだよ。』

『さう。難有う。氣休めだともツたら、西宮さんは實があるよ。』

『早く奥へお出でな。』と、小萬は懷紙で鐵瓶の下を煽いで居る。

吉里は燭臺煌々たる上の間を眩しさうに覗いて、『何だか悲アしくなるよ。』と、覺えず腮を襟に入れる。

『顏出だけでも好いんですから、鳥渡彼方へお出でなすツて下さい。』と、例のお熊は障子の外から聲を掛けた。

『靜かに爲てお呉れ。お客さまが居らツしやるんだよ。』

『御免なさいまし。』と、お熊は障子を開けて、『小萬さんの花魁、如何も濟みませんね。』と、莞爾會釋し、今奥へ行かうとする吉里の背後から、『花魁、困るぢやアありませんか。』

『今行くツたら能いぢやアないか。あゝ腌臜いよ。』と、吉里は振向きも爲ないで上の間へ入ツた。

客は二人である。西宮は床の間を背に胡坐を組み、平田は窓を背にして膝も崩さずに居た。

西宮は卅二三歳で、むツくりと肉づいた愛嬌のある丸顏、結城紬の小袖に同じ羽織と云ふ打扮で、何處となく商人らしくも見える。

平田は私立學校の教員か、專門校の學生か、又小官員とも見れば見らるゝ風俗で、黑七子の三紋の羽織に、藍縞の節絲織と白ツぽい上田縞の二枚小袖、帶は白縮緬をぐいと緊り加減に卷いて居る。歳は廿六七にもならうか。髮は左まで櫛の齒も見えぬが、房々と大波を打ツて艶があツて眞黑であるから、雪にも紛ふ顏の色が一層引立ツて見える。細面ながら力身をもち、鼻がすツきりと高く、きツと締ツた口尻の愛嬌は靨かとも見紛はれる。兎角柔弱たがる金縁の眼鏡も厭味に見えず、男の眼にも男らしい男振であるから、遊女なぞには別けて好かれさうである。

吉里が入ツて來た時、二客とも其顏を見上げた。平田は直ぐ其眼を外し、思出した樣に猪口を取ツて仰ぐが如く口へつけた、酒がありしや否やは知らぬが。

吉里の眼も先づ平田に注いだが、直ぐ西宮を見て懷愛しさうに莞爾笑ツて、『兄さん。』と、裲襠を引摺ツた儘走り寄り、身を投掛けて男の肩を抱いた。

『はゝはゝゝ。門迷を爲ちやア困るぜ。何だ、先刻から二階の櫺子から覗いたり、店の格子に蟋蟀をきめたり爲て居た癖に。』と、西宮は吉里の顏を見て笑ツて居る。

吉里は態とつんとして、『餘り馬鹿にお爲なさんなよ。そりや昔の事ですのさ。』

『さう諦めて丶吳れりやア、私も大助りだ。あいたた丶、太股ふツつりのお身替なざア、些と難有過ぎる方だぜ。此上臂突にされて、ぐりぐりでも極められりやア、世話アねえ。復讐が可畏から、覺えてるが能い。』

『だツて、餘り憎らしいんだもの。』と、吉里は平田を見て、『平田さん、お前さん能く今晩來たのね。未だお國へ行かないの。』

平田は鳥渡吉里を見返ッて直ぐ脇を向いた。

『さアそろ〱始まッたぞ。今夜は紋日でなくツて、紛紜日とでも云ふんだらう。彼方でも始まれば此方でも始まる。酉の市は明後日で御座い。さア負けたア〱、大負にまけたア〱。』と、西宮は理も分らぬ事を云ひ、態とらしく高く笑ふと、『本統に馬鹿に爲て居ますね。』と、吉里も笑掛けた。

『戯言は戯言だが、先刻から大分紛雜てるぢやアないか。餘り痼癪を發さないが可いよ。』

『だツて。ね、そら‥‥。』と、吉里は眼に物を云はせ、『だもの、些たア痼癪も發りまさアね。』

『さうかい。來てるのかい、富澤町が。』と、西宮は小聲に云ッて、『其も好いさ。久振で——餘り久振でもなかッた、一昨日の今夜だッけね。其でも先ア久振の積りで、おい平田、盃を廻したら可いだらう。おッと、お代目だッた。おい、未だかい。酒だ〱。』と、次の間へ掛けて呼ぶ。

『もう少時。お前さんも性急だ事ね。つひぞない。お梅どんが氣が利かないんだもの、加炭どいて吳れりやア好いのに。』と、小萬が煽ぐ懷紙の音がして、低聲の話聲も聞えるのは、未だお熊が次の間に居ると見える。

吉里は紙卷煙草に火を點けて西宮へ與へ、『まだ何か云ッてるよ。あ丶、可厭だ〱。』

『また可厭だ〱を始めたぜ。彼人も相變らず能く來てるぢやアないか。餘り我等に負けない方だ。迷はせて置いて、今更厭だとも云へまい。旨い言の一語も云ッて、些たア可愛がッて遣るのも功德になるぜ。』

『止してお吳んなさいよ。一人者に爲ッたと思ツて、餘り酷待ないで下さいよ。』

『一人者だと。』と、西宮は態とらしく云ふ。

『だツて、一人者ぢやアありませんか。』と、吉里は西宮を見て淋しく笑ひ、屹と平田を見詰めた。見詰めて居る中に眼は一杯の涙となッた。

(二)

平田は先刻から一言も云はないで居る。酒の無い猪口が幾度飮まれるものでもなく、食ひたくもない下物を挾ッたり、煮付く樂鍋に杯泉の水を加したり、三つ葉を挾んで見たり、種々に自分を持扱ひながら、吉里が此方を見て居らぬ隙を覗ッては、眼を放し得なかッたのである。隙を見損ッて、覺えず今吉里へ顏を見合せると、涙一杯の眼で怨めしさうに自分を見詰めて居たので、はッと思ひながら外し損ひ、同じく呢と見詰めた。吉里の眼にはら〱と涙が零れると、平田は耐らなくなッて垂頭いて、深く息を吐いて涙ぐんだ。

西宮は二人の樣子に口の出し端を失ひ、酒は無し所在はなし、又もや次の間へ聲を掛けた。

『おい、まだかい。』

『あ丶漸と出來ましたよ。』と、小萬は燗瓶を鐵瓶から出しながら、『其樣譯なんだからね。いいかね、お熊どん。私が又後で能く云ふからね、今晩は我儘を云はせて置いてお吳れ。』

『どうかねえ。お賴み申しますよ。』と、お熊は唐紙越に、『花魁、此方の御都合でねえ、能御座んすか。』

『腌臢いよッ。』と、吉里も唐紙越に睨んで、『人の事ばッかし云はないで、自分も氣を付けるが能いぢやアないか。些たア其處で燗番でも爲る

が好いんさ。小萬さんの働いてお居でなのが見えないのか。自分が嫌なら、誰か遣しとくが能いぢやアないか。』

『はい〳〵。どうもお氣の毒さま。』と、お熊は室外へ出た。

『本統に誰か遣してお呉んなさいよ。お梅どんが何處か居るだらうから、來る樣に云ッてお呉んなさいよ。』と、小萬も上の間へ來ながら聲を掛けたが、お熊は既う居ないのか返辭がなかッた。

『彼樣可厭な奴ッちやアないよ。新造を何だと思ッてるんだらう。花魁に使はれてる奉公人ぢやアないか。餘り愚圖々々云はうもんなら、御内所へ斷ッて遣るぞ。何だらう、奉公人の癖に。』

『もう好いぢやアないかね。新造衆なんか相手にしたッて、如何なるもんかね。』

小萬は上の間に來て平田の前に坐ッた。

平田は待兼ねたと云ふ風情で、『小萬さん、一杯獻げようぢやアないかね。』

『まアお熱燗い所を。』と、小萬は押へて平田へ酌をして、『平田さん、今晩は久振で醉ッて見ようぢやありませんか。』と、密と吉里を見ながら云ッた。

『さらさ。』と、平田は少時考へ、ぐッと一息に飲乾した猪口を小萬にさし、『如何だい。醉ッても可いかい。』

『さうさなア。君まで僕を困らせるんぢやアないか。』と、西宮は小萬を見て笑ひながら、『何だ、飲めも爲ない癖に。管を卷かれちやア、旦那樣が又お困り遊ばさア。』

『何時私が管を卷いた事があります。』と、小萬は仰山らしく西宮へ膝を向け、『さアお云ひなさい。外聞の惡い事をお云ひなさんなよ。』

『小萬さん、お前も醉ッてお遣りよ。私や管でも卷かないぢやア遣瀬がないよ。ねえ兄さん。』と、吉里は平田をじろりと見て、西宮の手を確と握り、『ねえ、此位な事は勘忍して下さるでせう。』

『さア事だ。一人でさへ持餘しさうだのに、二人まで大敵を引受けて溜るもんか。平田、君が一方を防ぐんだ。吉里さんの方は僕が引受けた。吉里さん、さア思ふ樣管を卷いてお呉れ。』

『ほゝほ。彼樣事を云ッて、又私を嘖めようともッて。小萬さん、お前加勢してお呉れよ。』

『いやな事だ。私や平田さんと仲能くして、大人しく飲むんだよ。ねえ平田さん。』

『ふん。不實同志揃ッてやがるよ。平田さん、私が其樣に怖いの。報着きや爲ませんからね、安心してお居でなさいよ。小萬さん、注いでお呉れ。』と、吉里は猪口を出したが、『小杯くッて面倒臭いね。』と傍に在ッた湯呑と取り替へ、『滿々注いでお呉れよ。』

『そろ〳〵お株をお始めだね。大きい物ぢやア毒だよ。』

『毒になッたッて關やアしない。お酒が毒になッて死んぢまッたら寧そ苦勞が無くッて……。』と、吉里は垂頭き、握ッて居た西宮の手へはらはらと涙を零した。

平田は額に手を當てゝ横を向いた。西宮と小萬は顏を見合せて覺えず溜息を吐いた。

『あゝ、つまらない〳〵。』と、吉里は手酌で湯呑へだく〳〵と注ぐ。

『お止しと云ふのに。』と、小萬が銚子を奪らうとすると、『酒でも飲まないぢやア……。』と、吉里が又注ぎに掛るのを、小萬は無理に取上げた。吉里は一息に飲み乾し、顏を獅嚙めて横を向き、苦しさうに息を吐いた。

『剛情だよ。また後で苦しがらうと思ッて。』

『お酒で苦しい位な事は……。察して下さるのは兄さんばかりだよ。』と、吉里は西宮を見て、『勘忍して下さいよ。もう愚癡は溢さない約束

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

でしたツけね。ほゝほゝゝゝ。』と、淋しく笑ツた。

『花魁、花魁。』と、お熊が又しても室外から聲を掛ける。

『今直に行くよ。』と、吉里も今度は優しく云ふ。

お熊は何も云はないで彼方へ行ツた。

『鳥渡行ツて來ちやア如何だね、も一杯威勢を附けて。』

西宮が與した猪口に滿々と受けて、吉里は考へて居る。

『本統にさうお爲よ。餘り放擲ツといちやア不可いよ。善さんも氣の毒な人さ。此樣に冷遇ても厭な顔も爲ないで、毎晩の樣に來てお居でなんだから、怒らせない位にや爲てお遣りよ。』と、小萬も吉里が氣に觸らない程にと言葉を添へた。

『また無理をお云ひだよ。』と、吉里は猪口を乾して、『はい、兄さん。本統に善さんにや氣の毒だとは思ふけれど、顔を見るのも可厭なんだもの。信切な人ではあるし……。信切にされる程厭になるんだもの。誰かの樣に、實情が無いんぢやアなし、義理を知らないんぢやアなし……。』

平田はぷいと座を起ツた。

『お便所。』と、小萬も起たうとする。『なアに。』と、平田は急いで次の間へ行ツた。

『放擲ツてお置きよ、小萬さん。何處へでも自分の好きな處へ行くが好いやね。』

次の間には平田が障子を開けて、『おやツ、草履がない。』

『また誰か持ツてツたんだよ。困る事ねえ。私のを穿いてお出でなさいよ。』と、小萬が聲を掛ける中に平田が重たさうに上草履を引摺ツて行く音が聞えた。

『意氣地の無い歩きツ振ぢやないか。』と、態とらしく云ふ吉里の頬を、西宮は鳥渡突いて、『ははゝ。大分愛想盡を仰有るね。』

『云ひますとも。ねえ、小萬さん。』

『へん、また後で泣かうと思ツて。』

『誰が。』

『好し。屹度だね。』と、西宮は念を押す。

『ふゝん。』と、吉里は笑ツて、『もう虐めるのは澤山。』

店梯子を駈上る四五人の足音がけたゝましく聞えた。『お客さまア。』と、聲々に呼びかはす。廊下を走る草履が忙しくなる。『小萬さんの花魁、小萬さんの花魁。』と、呼ぶ聲が走ツて來る。

『いやだねえ、今時分になツて。』と、小萬は返辭を爲ないで眉を顰めた。

ばた〳〵と走ツて來た草履の音が小萬の室の前に止ツて、『花魁、鳥渡。』と、中音に呼んだのは、小萬の新造のお梅だ。

『何だよ。』

『鳥渡お顔を。』

『あい。初會なら謝罪ツてお呉れ。』

『お馴染ですから。』

『誰だ。誰が來たんだ。』と、西宮は小萬の顔を眞面目に見詰めた。

『おほゝ――、妬けるんだよ。』と、吉里は笑出した。

『はゝはゝゝ。如何だい、僕の藥罐から蒸氣が發ツてやアしないか。』

『あゝ、發ツてますよ。口惜いねえ。』と、吉里は西宮の腕を爪捻る。

『あいた。酷い事を爲るぜ。おゝ痛い。』と、西宮は仰山らしく腕を擦る。

小萬は莞爾笑ツて、『餘り酷い目に會はせてお與れでないよ、蟲が發ると困るからね。』

『はゝはゝ。でかばちもない蟲だ。』と、西宮。

『ほゝほゝ。可愛い蟲さ。』

『油蟲ぢやアないか。』

『苦勞の蟲さ。』と、小萬は西宮を鳥渡睨んで出て行ッた。

折から撃ッて來た拍子木は二時である。本見世と補見世の籠の鳥が各自棲に歸るので、一時に上草履の音が轟き始めた。

(三)

吉里は今しも最後の返辭をして、わッと泣出した。西宮はさびたの烟草を拭ひながら、戰へる吉里の島田髷を見詰めて術なさうだ。

燭臺の蠟燭は心が長く燃出し、油烟が黑く上ッて、燈は暗し數行虞氏の涙と云ふ風情だ。

吉里の涙に咽ぶ聲が稍途切れた處で、西宮はいゝさびたを拭つて居た手を止めて口を開いた。

『私や氣の毒で耐らない。實に察しる。此で、平田も心殘りなく故鄕へ歸れる。私も心配した甲斐があると云ふものだ。實に難有かッた。』

吉里は半顏を上げたが、返辭を爲たいで、懷紙で涙を拭いて居る。

『他の事なら何とでもなるんだが、一家の浮沈に關する事なんだから、如何も平田が歸鄕らない譯に行かないんでね、私も實に困つて居るんだ。』

『家君さんが何故御損なんか爲すッたんでせうねえ。』と、吉里は矢張涙を拭いて居る。

『何故ッて。手違だから詮方がないのさ。家君さんが氣拔の樣になッたと云ふのに、幼稚い弟はあるし、妹はあるし、お前さんも知ッてる通り母君が死去のだから、如何しても平田が歸鄕ッて、一家の仕法をつけなければならないんだ。平田も可哀想な譯さ。』

『平田さんがお歸鄕なさると、皆さんが樂にお成りなさるんですか。』

『さうは行くまい。大概な事ぢや、中々樂に爲ると云ふ譯には行かなからう。それで、急に又出京ると云ふ目的もないから、お前さんにも無理な相談をした樣な譯なんだ。先日來の樣にお前さんが泣いてばかり居ちやア、談話は出來ないし、實に困切ッて居たんだ。此で私も漸と安心した。實に難有い。』

吉里は口にこそ最後の返辭をしたが、心には未だ諦めかねた風で、深く考へて居る。

西宮は注ぎ置きの猪口を口へつけて、『おゝ冷たい。』

『おや、濟みません、氣が付かないで。ほゝほゝほ。』と、吉里は淋しく笑ッて銚子を取上げた。

眼千兩と云はれた眼は眼蓋が腫れて赤くなり、紅粉はあはれ涙に洗ひ去られて、一時間前の吉里とは見えぬ。

『如何だね、一杯。』と、西宮は猪口をさした。

吉里は受けて篩いで貰ッて口へ附けようとした時、生憎涙は猪口へ波紋をつくッた。眼を閉ッて一息に飮乾し、猪口を下へ置いて垂頭いて又泣いて居た。

『本統でせうね。』と、吉里は涙の眼で外見惡さうに西宮を見た。

『何が。』と、西宮は眼を丸くした。

『私や何だか……、欺される樣な氣がして。』と、吉里は西宮を見て居た眼を疊へ移した。

『困るなア、如何も。まだ疑ッてるんだね。平田が其樣男か、其樣男でないか、五六年兄弟同樣にして居る私より、お前さんの方が能く知ッてる筈だ。私が眞逆お前さんを欺す……。』と、西宮が尙ほ說進まうとするのを、吉里は慌てゝ遮ッた。『あら、さうぢやアありませんよ。兄さんには濟みません。勘忍して下さいよ。だッて、平田さんが餘り平氣だから……。』

『なに平氣なものか。平生彼樣に快濶な男が、碌に口も利き得ないで、お前さんの顏色ばかり見て居て、此處にも居得ない位だ。』

『本統にさうなのなら、兄さんに心配させないで、直接に私に能く話して吳れるが能いぢやア

ありませんか。』

『いや、話したらう。幾度も話した筈だ。お前さんが相手に爲ないんぢやないか。話さうとすると、何を云ふんですと云ッて腹を立つッて、平田は弱切ッて居たんだ。』

『だッて、私や否ですもの。』と、吉里は自分ながら可笑くなッたらしく莞爾した。

『それ御覽。其だもの。平田が談話す事が出來るものか。お前さんの性質も、私は能く知ッて居る。其だから、お前さんが得心した上で、平田を故郷へ出發せたいと、斯うして平田を引張ッて來る位だ。不實に考へりやア、無斷で不意と出發て行くかも知れない。私は兎も角、平田は其樣不實な男ぢやない、實に止むを得ないのだ。もう承知してお呉れだッたのだから、くどく云ふ事もないのだが……。お前さんの性質だと……もう解ッてるんだから安心だが……。吉里さん、本統に賴むよ。』

吉里は又泣出した。其聲は室外へ漏れる程だ。西宮も慰めかねて居た。

『へい、お誂。』と、仲どんが次の間へ何か置いて行ッた樣である。

また障子を開けた者がある。次の間から上の間を覗いて、『おや、座敷の花魁は未だ彼方で御在ますか。』と、聲を掛けたのは、十六七の眼の大きい可愛らしい女で、これは小萬の新造のお梅である。

『平田さんも未だお出でなさらないんですね。』と、お梅は仲どんが置いて行ッた臺の物を上の間へ運び、『お飯に爲すッちやア如何で御在ます。皆さんをお呼び申しませうか。』

『まア好いや。平田は吉里さんの座敷に居るかい。』

『はい。お一人でお臥ッて居らッしやいましたよ。お淋しいだらうと思ッて私が參りますとね、彼方へ行ッてろと仰有ッて、何だか考へて居らッしやる樣ですよ。』

『旨く云ッてるぜ。淋しからうと思ッてぢやアなからう、平田を口説いて鉢を喰ッたんだらう。はゝはゝ。好い氣味だ。乃公の云ふ言を、聞かなかッた罰だぜ。』

『あら、彼樣事を。覺えて居らッしやいよ。』

『本統だから、顏を眞赤にしたな。はゝはゝは。』

『あら、何時顏なんか眞赤に爲ました。其樣事をお云ひなさると、斯うですよ。』

『いや、御免だ。擽るのは御免だ。降參、降參。』

『もう云ひませんか。』

『もう云はない／＼。仲直りにお茶を一杯。湯が沸いてるなら、濃くして賴むよ。』

『いやな事だ。』と、お梅は次の間で茶を入れ、湯呑を盆に載せて持ッて來て、『憎らしいけれども、はい。』

『いや、難有いな。此で平田を口説いたのと差引に爲て遣らう。』

『まだ彼樣事を。』

『おッと危い。溢れる／＼。』

『此樣時でなくッちやア、敵が取れないわ。ねえ、花魁。』

吉里は淋しさうに笑ッて、何とも云はないで居る。

『今擽られて耐るものか。降參、降參、本統に降參だ。』

『屹度ですか。』

『屹度だ／＼。』

『好い氣味だ。謝罪らせて遣ッた。』

『はゝはゝ。お梅どんに擽られて耐るもんか。男を擽る急所を心得てるんだからね。』

『何とでも仰有い。どうせ貴郎には勝ひませんよ。』と、お梅は立上りながら、『御膳はお後で、皆さんと御一處ですね。も少時してから又參り

ます。』と、次の間へ行ツた。

誰が覗いて居たのか、障子をぴしやりと外から閉てた者がある。

『あら、誰か覗いてたよ。』と、お梅が急いで障子を開けると、ぱた〳〵ぱた〳〵と廊下を走る草履の音が聞えた。

『まア。』と、お梅の聲は呆れて居た。

（四）

『如何したんだ。』と、西宮は事ありさうに入ツて來たお梅を見上げた。

『善さんですよ。善さんが覗いて居なすツたんですよ。』と、お梅は眼を丸くして、今顔を上げた吉里を見た。

『おへない妬漢だよ。』と、吉里は腹立しげに見えた。

『先刻からね、花魁のお座敷を幾度も覗いて居なさるんですよ。平田さんが怒んなさりや爲まいかと思ツて、本統に心配しましたよ。』

『餘り其樣眞似をすると、謝絶ツて遣るから好い。あゝ、自由にならないもんだ事ねえ。』と、吉里は西宮をつく〴〵視て、垂頭いて溜息を吐く。

『座敷の花魁は遲う御在ます事ね。鳥渡見て參りますよ。』と、お梅は次の間で鐵瓶に水を加す音をさせて出て行ツた。

『西宮さん。』と、吉里は聲に力を入れて、『私や如何したら可いでせうね。本統に辛いの。私の身にもなツて察して下さいよ。』

『實に察しる。』と、西宮は少時考へ、『實に察して居るのだ。お前さんに無理に頼んだ私の心の中も察して貰ひたい。中々私に云へさうも無かツたから、最初は小萬に頼んで話して貰ふ積りだツたのさ。小萬も其樣事は話せないて云ふから、詮方なしに私が話した樣な譯だからね、お前さんが承知して呉れただけ、私や尙ほ察して居るんだよ。三十面を下げて、馬鹿を盡してる位だから、他には笑はれるだけ人情は先ア知ツてる積りだ。何卒、平田の爲だと思ツて、我慢して、ねえ、吉里さん、何卒頼むよ。』

『詮方がありませんよ、ねえ兄さん。』と、吉里は終に諦めたかの如く云放しながら尙ほ考へて居る。

『私も此樣苦しい思を爲た事はない。』

『斯う云ふ果敢ない縁なんでせうよ、ねえ。考へると、小萬さんは羨ましい。』と、吉里は染々云ツた。

『いや、私も來ない積りだ。』と、西宮は斷乎云ひ放ツた。

『えツ。』と、吉里は吃驚して、『え、何故。如何なすツたの。』と、西宮の顔を見詰めて呆れて居る。

『いや、何故と云ふ事もない。辛いのは誰しも同一だ。お前さんと平田の苦衷を察しると、私一人如何して來られるものか。』

『何故其樣事をお云なさるの。私や其樣積りで。』

『そりや解ツてる。其で來る來ないと云ふ譯ぢやない。實に忍びないからだ。』

『いや、いや、私や否ですよ。私が小萬さんに濟みません。平田さんには別れなければならないし、兄さんでも來て下さらなきや、私や如何します。私が惡かツたら謝罪るから、兄さん今迄通り來て下さいよ。私を可哀想だと思ツて來て下さいよ。え、能御座んすか。え、え。』と、吉里は詫びる樣に賴む樣に幾度となく繰返す。

西宮は垂頭いて眼を閉ツて、呪と考へて居る。

吉里は其顔を覗込んで、『能御座んすか。ねえ兄さん、能御座んすか。私や兄さんでも來て下さらなきやア……。』と、又泣聲になツて、『え、能御座んすか。』

西宮は閉目ツて垂頭いて居る。

『能御座んすね、能御座んすね。本統、本統。』と、吉里は幾度となく念を押して西宮を點頭かせ、はアッと深く息を吐いて涙を拭きながら、『兄さんでも來て下さらなきやア、私や生きちやア居ませんよ。』

『よろしい、よろしい。』と、西宮は點頭きながら、『平田の方は斷念ツて吳れるね。私もお前さんの事に就いちやア、後來何とでも爲ようから。』

『詮方がありません、斷念らない譯には行かないのだから。もう、音信も出來ないんですね。』

『さア。さう思ツて居て貰はなければ‥‥。』と、西宮も判然とは答へかねた。

吉里は少時考へ、『餘り未練らしいけれどもね、後生ですから、明日にも、も一遍連れて來て下さいよ。』と、顏を赧くしながら西宮を見る。

『もう一遍。』

『えゝ、故郷へ發程までに、もう一遍御一緒に來て下さいよ、後生ですから。』

『もう一遍。』と、西宮は繰返し、『もう、其樣間はないんだよ。』

『えツ。何時故郷へ立發んですツて。』と、吉里は膝を進めて西宮を見詰めた。

『新橋の、明日の夜汽車で。』と、西宮は云ひ惡さうである。

『えツ、明日の‥‥。』と、吉里の顏色は變ツた。西宮を見詰めて居た眼の色が異樣くなると、齒をぎり〳〵と嚙んだ。西宮が吃驚して聲を掛けようとした時、吉里はうゝんと反ツて西宮へ倒れ掛ツた。

折能く入ツて來た小萬は、吉里の樣子に吃驚して、『えツ、如何お爲なの。』

『如何した所ぢやアない。早く如何かして吳れ。如何も非常な力だ。』

『しツかりお爲よ。吉里さんしツかりお爲よ。反ツちやア不可いのに。あら其樣に反ツちやア。』

『平田は如何した。平田は、平田は。』

『平田さんですか。』

何時かお梅も此室に來て、驚いて手も出ないで、茫然突立ツて居た。

『お梅どん其處に居たのかい。何を茫然してるんだよ。平田さんを早く呼んでお出で。氣が利かないぢやアないか。早くお爲。大急ぎだよ。反ツちやア不可いと云ふのにねえ。しツかりお爲よ。吉里さん。吉里さん。』

お梅は俄かに周章出し、唐紙へ衝當り障子を倒し、素足で廊下を駈出した。

（五）

平田は臥床の上に立ツて帶を締掛けて居る。其帶の端に吉里は膝を投掛け、平田の羽織を顏へ當てゝ伏沈んで居る。平田は上を仰き眼を合り、後背からは涙が頰へ線を畫き、下脣は嚙まれ、上脣は戰へて、帶を引くだけの勇氣もないのである。

二人の定紋を比翼につけた枕は意氣地なく倒れて居る。燈心が焚込んで、あるか無きかの行燈の火光は、『春如海』と書いた額に映ツて、字形を夢の樣にして居る。

歸期を報せに來た新造のお梅は、次の間の長火鉢に手を翳し頰を焙り、上の間へ耳を聳てゝ居る。

『もう何時になるんかね。』と、平田は氣の無い樣な調子で、次の間のお梅に聲を掛けた。

『も少時前五時を報ちましたよ。』

『え、五時過ぎ。遲くなツた、遲くなツた。』と、平田は思切ツて帶を締めようとしたが、吉里が動かないので其效がなかツた。

『彼方ぢやアもう支度を爲てるのかい。』

『はい。西宮さんは些ともお臥らないで、此方

の……。』と、云過ぎようとして氣が付いたらしく、お梅は言葉を切ッた。

『さうか。氣の毒だッたなア。さア行かう。』

吉里は倘ほ帶を放さぬ。

『まア好いよ。其樣に急がんでも好いよ。』と、聲を掛けながら、障子を開けたのは西宮だ。

『おやッ、西宮さん。』と、お梅は見返ッた。

『起きてるのかい。』と、西宮は態と手荒く唐紙を開け、無遠慮に屛風の中を覗くと、平田は帶を締了らうとする所で、吉里は後から羽織を掛け、其手を男の肩から放し難さうに見えた。

『失敬した、失敬した。さア出掛けよう。』

『まア好いさ。』

『さうでない、さうでない。』と、平田は忙がしさうに體を搖ぶりながら室を出掛けた。

『あゝ、烏渡、あの……。』と、吉里の聲は戰へた。

『おい、平田。何か忘れた物があるんぢやアないか。』

『なに無い。何にも無い。』

『君は無からうが……。おい、おい、何を其樣に急ぐのだ。』

『何をッて。』

西宮は平田の腕を取ッて、『まア何でも好い。用があるから……。まア、少し落付いて行くさ。』と、再び室の中に押込んで、自分はお梅と共に廊下の欄干に倚れて、中庭を見下して居る。

研出した樣な月は中庭の赤松の梢を屋根から廊下へ投げて居る。築山の上口の鳥居の上にも、山の上の小さな辨天の社の屋根にも、霜が白く見える。風はそよとも吹かぬが、しみる樣な寒氣が足の爪先から全身を凍らする樣で、覺えず胴戰が出る程だ。

中庭を隔てた對向の三つ目の室には、まだ次の間で酒を飲んで居るのか、障子に男女二個の影法師が映ッて、聞取れない程の話聲も聞える。

『中々冷えるね。』と、西宮は小聲に云ひながら後向になり、背を欄干に倚せ變へた時、二上り新内を唄ふのが對面の座敷から聞えた。

「わるどめせずとも、そこ放せ、明日の月日の、無い樣に、止めるそなたの、心より、かへる此身は、どんなに〳〵、つらからう――」

『あれは東雲さんの座敷だらう。さびの有る美い音だ。何處から來る人なんだ。』と、西宮がお梅に問ねた時、廊下を急ぎ足に――吉里の室の前は別けて走る樣にして通ッた男がある。

お梅は一寸西宮の袖を引き、『善さんでしたよ。』と、彼男を見送りながら細語いた。

『え、善さん。』と、西宮も見送りながら、『ふうむ。』

三つばかり先の名代部屋で唾壺の音をさせたかと思ふと、吃驚する樣な大きな欠伸をした。

途端に吉里が先に立ッて平田も後から出て來た。

『お待遠さま。兄さん、濟みません。』と、吉里の聲は存外沈着いて居た。

平田は驚くほど蒼白めた顏をして、『遲くなッた、遲くなッた。』と、獨語の樣に云ッて、忙がしさうに歩き出した。足には上草履を忘れて居た。

『平田さん、お草履を召して行らッしやい。』と、お梅は戾ッて上草履を持ッて、見返りもせぬ平田を追掛けて行く。

「兄さん。」と、吉里は背後から西宮の肩を抱いて、『兄さんは來て下さるでせうね。屹度ですよ、屹度ですよ。』

西宮は肩へ掛けられた吉里の手を確と握ッたが、妙に胸が迫ッて返辭がされないで、唯點頭いたばかりだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com